

□ 私たちは考えねばなりません。

「汝、培わずして、作物の実を得んと思ふなかれ。汝、骨折らずして、利益を思ふなかれ。汝、働かずして、富まんことを思ふなかれ。汝、人を愛する能わずして、愛を得んと思ふなかれ。それ汝の墮落なればなり。」

「他によつて温められたる者は、再び冷えん。汝の内に、光と熱とを出す力ありや否や。」と。

弟よ妹よ 苦しくても

皆様、皆様の内には、悲しい境遇の人が多いのを知っています。

内的革新に急ぎつつ苦しい煩悶を続けている人を知っています。

愛に飢えている人を知っています。体の弱い人を知っています。

人は皆苦しい。けれども、私たちは、苦しい時、真面目に苦しむより外ありません。苦から逃れようとすればするほど苦を増してきます。苦しければ、苦しみましょう。苦を苦しむ真摯な心はきつと、苦のその真唯中に、何か大きな物を見出すでしょう。私たちの内面に湧き出る苦しみは、真実の苦しみは、私たち改造向上の源泉であります。

苦しみに対して卑怯になつてはなりません。人が墮落する。それは、苦から卑怯に逃れるのです。苦を苦として、強い人のみ向上の一路をたどります。弟妹よ、苦しくても、忍べ。進め。苦を苦しむことによつてのみ慰められなくてはならぬ。

### 巻頭の叫び

□人は苦しむ。全ての人は苦しむ。ある時は笑うだろう。ある時は歌うだろう。ある時は躍るだろう。けれども、酔いは醒める。笑いも、歌も消えて行く。そして後に残る物は、刀無き寂しきと、堪えがたき悲しみ。青春を飾り、歌い、歎びし女も老い、力を誇り、智慧を誇り、富を得、名誉を勝ち得し男も亡ぶ。

かくして苦しむ人の子は、何時来るか解らない死の魔の手が近よりつつ、我をおびやかしていることを知っている。苦惱！そして死！何たる人の子の運命よ。唯物論者たちは言った。

「人もまた物質である。肉体と共に我は亡ぶ」と。快樂論者たちは言った。「人の子の生きる目的は快樂である。人よ樂しめ、最大多数の最大快樂を」と。けれども、泡沫の如き快樂の裏に潜む寂しみをいけません。

人にとつて、現実のこの苦しみと、煙のような樂しみとで達し得たその死が、我の滅亡であつて何としよう。苦しみ、死、我の滅亡！

苦しんで生きる必要がどこにある。僕は信ずる。「僕たちは生きる。永遠に生きる。」否、我々は、今、ひしひしと、我が内に靈感している、「汝は永遠にあり」と。目覚めよ！ その後に苦しみがある。自覚！ 苦しみ、自覚！ 苦しみ。そのみが、人に与えられたる最大なる幸福である。我らに与えられたる永遠への光明と、向上とは、我々の生の価値と意義とでなければならぬ。かくして、私は生きねばならぬ。滂沱たる汗と涙と淋漓たる血を流しつつ苦しんで。

私たちは一日にたった一度でもいい、真面目な自分でいなければならぬ。虚偽、虚飾、怒り恐れ、高慢、憎しみ等の重荷を下して、真実の自分を味わわなくてはならぬ。

人生はついにただ独りだろうか？

人生はついに我ただ一人だ。この見方は寂しい見方だ。けれども、事実をいかんせん。然りだ、私はただ一人だ。

私たちは生れた時からたった一人であった。ただの一人で生れた。親もいた、兄弟もいる。隣人もいる。けれども私は私で、私の心は私しか知らない。一生を汗脂で子供のために、美しい田と莫大な金を残した親があった。しかし、残された親の心は、残った子供の一時の遊興に使われてしまった。「匍えば立て、立てば歩めの親心、我身に積る老いを忘れて」と、嬰兒の時から真実育てて来た子供は、新思想とやら、今は、居所さえわからなくなった。子供は自覚した。そして、自己発展、人生理想のために、国家社会に貢献しようとした。けれども、頑固な、そして、利己的な親は親の勝手の悪くなるのを恐れて、子供の心を殺して、一生を不平の内に送らしたではないか。

親類は親切だった。けれども、家運が衰えて来るにつれて、氷よりも冷たくなるではないか。

親はいる。親は多くの人にとって有り難い。けれども、その親さえ、明日いなくなるかも知れない。世の中には、親のない人、顔さえ知らない人もたくさんいる。

けれども親はいる。まだ若い、元気だ。死にそうにもない。結構なことだ。しかし、病気になつたらどうする。親は介抱してくれるだろう。けれども、病気そのものには、親は如何することも出来ん。七転八倒、苦しむ時、親に与えられたものは何だ？ろう。熱き同情の涙と、ただ最後に与えられたる祈りしか何ものもないだろう。

病気なら医者があると言いたい。そうだ。医は仁術だ。患者にとつては救いの神だ。けれども、医者も亦、我という一物の周囲を廻つて、私の組織に力づけてくれるに過ぎない。大抵の病気は治る。けれども、重病が二つ三つと併発したら何とする。医者はついに匙をなげた。後に残った私はどうだろう。

ああ終に孤独！「我ただ独りだ」と言わないでいられようか。人生、「盃から盃に渡る五十年」死のすぐ前、死の刹那、王侯貴紳といえども、親も子も、金も位も、役に立たないたった一人の眞の孤独がある。そうだ。私たちは、一人生れて、一人歩み、そして、一人死ぬるのだ。

### 黙想一番

けれども、私たちは、目を閉じ、口をふさぎ、深い黙想に入らねばなりません。私たちは考えを変えて、もつともつと深く、大いに、何ものかを見出すべく、黙想かんがえます。そして、目を開きます。そして、明るい大きな光に輝く世界に私を見出すことが出来はせんでしょうか。

空は晴れて、東の山から陽が、真赤に燃える太陽が昇つて来ます。全ては、平等に平和に照らされて、自由に生きんとする力を得ています。吸え吸え、あの澄んだ朝の空気を。弱い者も強い者も貧しい者も富める者も。全て人は、あまりに自由に、あま

りに平等な恵みには感謝もしなければ、恩とも思わないものだ。陽の光と空気、何の気兼ねがいろいろぞ。私は平等に恵まれている。

私たちが生きるには、また食物がある。けれども、汗をおしみさえしないで働く人には、パンを得ることは難しいことではない。

陽の光。空気。そしてパン、生活の基調はここから出る。

かくて万物は生きていく。これだけは全てが持つている。

美、それは人間の造つたものではない。即ち、仮有(カリニツクツタモノ)ではない。宇宙の実在なのだ。人間には、美を楽しむことをゆるされている。

私たちは美しい絵、美しい歌、美しい細工等に向つた時、その美しさに打たれる。美術品の展覧会に幾万の人が押しかけるのは、その美に打たれたためなのだ。けれども、人間の美は終に人間の造つた美である。私たちの前に、毎日毎日現れる天然自然の美の前に、どれだけの価値がある。人間の美は天然の美の真似である。あるいは自然の美の表出である。

私たちが、崇高な美に、我を忘れて、ぬかづいた時、打たれた時、「これはこれはとばかり……」それさえ間にあわない。我なく、天地なく、時間なく、苦なく、楽なく、我即天地、天地即我、私たちは直に天地宇宙に脈絡貫通しなければならぬ。私は、ただ独りだろうか？

真は人間の心や行いではない。真は宇宙の根本の法則なのだ。宇宙は真なのだ。虚偽ではない。二と二と合わせて四となる。古今東西、五になつたことはない。水は高きより低きに流れる。水が熱にあえば水蒸気となる。雲となる。雲は冷れば雨となる。天地宇宙は糸乱れず運行している。如何に小さきものも大なるものも、この宇宙に存在する者は、同一法則に支配されている。真である。依怙もなければひいきもない。宇宙の真理、人間は、その智慧を使って、宇宙の真理を見出しては生活に応用すると同時に、その支配を受けねばならぬ。否、我々は、宇宙の法則、真理によって護られている。(国家の法則法律によって、我々は支配され、そして護られている様に。)

けれどももつと進んで、私たちは宇宙の内にいるからには、宇宙の真理そのものの現れでなくてはならぬ。私たちの体は、宇宙から出た、そして宇宙にかえる。私たちは不完全な人間だ。けれども昔の聖者は「衆生悉く仏性あり」と言つた。そして私たちはそれを信ずる。「煩惱即菩提」私たちは自覚せねばならぬ。真に独りだろうか。

善。誠。善とは、理想になつていくことだ。正しいことだ。道になつていくことだ。善を成さんためには、その心が誠でなければならぬ。誠とは、偽らざる心である。「私たちは人間である。人間生活には、そこに必ず道徳がある」と度々言つた。昔から道徳の形は変つた。東洋と西洋とではもう形は異つていく。けれど、善の本質、誠に至つては、決して違つてはいない。私たちは宇宙の意志は善である、誠であると信ずる。人の性も善である。

人間は偽りを言う。けれども、偽りは真の声ではない。「嬰兒を見よ」彼らには偽りはない。如何に悪人でも、「誠」に感じないものはない。

「鬼の目にも涙」見よ、この世智辛い世の中に、一夜を劇場の中で義人節婦の誠や佳人の薄幸に感奮し、同情せんために鬼のような男が急いでいるではないか。

私たちを開放し、私たちを救い、私たちを浄化するものは、理屈でもない。力でもない。ただ誠である。旅人のマントをぬがしたものは風の神ではなくて、実に温かい陽の光であった。

私たちは、友人の誠、兄弟の誠、親の誠、隣人の誠を知っている。

私たちは親の誠に泣かされる。親は真実に私を愛してくれる。私を兄弟も、友人も、隣人も見放した時すら益々大きな愛で愛してくれる。その誠が私の胸に直観的にわかつた時、私はただ一人だろうか。親の心と私の心が、パッと接触したその時、その間、私と親との間に薄紙一枚でも、毛髪一本でも入れる隔りがあるだろうか。

夫婦の間にせよ、兄弟の間にせよ、友人の間にせよ、隣人の間にせよ、天下の同胞にせよ、私たちの間には、時間と空間とを超越した温かい二身一体の融合を見るのである。誠が通じなければ、我が側の人たりとも、我にとつては、犬猫の存在するのと変りはない。誠の心で結ばば、千里の隔りも遠きものではない。私は、昨日も未だ見たこともない方から温かい便りを受けました。私は顔も知らない。けれども、私はその二様との間には懐しい何ものかの繋ぎを感じます。

私たちは誠の知れた時信じます。唯、理屈も訳もなく信じます。互に信ずる時、私たちの生活はたった一人でしょうか。生きているこの世で誰にも信じられない人があるかも知れない。そんなことは稀だけれども、誰にも信じられないで、寂しく暮すその人が、もし何かの書物一冊懐にして、悲しい時、うれしい時、不幸な時、その一冊を取り出しては読み、読んでは慰められていたならば、その人は唯の独りでしょうか。

お母様が死なれた方よ、お母さまの体がない。けれども一人ではない。お母様の誠を信ずる時、お母様のお写真に向つてその寂しさを語る時、あなたがたった独りでいるのでしょうか。

善！ 誠！ 私たちは目覚めねばならぬ。

宇宙。時間的にも、空間的にも無窮である宇宙は私たち人間の力で測り知ることはいかならないけれども、先哲や聖人達は、「天地は、真、善、美に対して永劫にむかつての創造」であると考えました。

宇宙の實在は、真、善、美であります。人間心の感情は、それを芸術化して、神と言いました。仏と見ました。ここに宗教は起つたのであります。

哲学は真を求め、道徳は善を言い、芸術は美を言います。私たちの心が、真理に打たれ、誠を思い、善を行い、美に感動する時、私たちの心は、宇宙に充満し、万物差別の底に潜む實在に一致するのであります。かくした時、私たちはたった一人ではありません。

千年の後、楠正成の忠義に感奮する心は、「誠」に於て楠公と感応しています。大海を見よ。起きては消え、寄せては失せる大波小波、かの波はただ一人の寂しい波でしようか。大海と離れて波はありません。一国の小波も、その体は直ちに、大海と同一物であつて、アメリカの岸を洗う波も、日本の明石に起る波も、その体は同一物で

はありませんか。私たちは、差別の上から見れば、千種、万様、小さい自分を見てい  
るけれども、これを大きく見れば、一切平等、私は直ちに宇宙であります。

私たちは、兄弟三百、わずか三百、兄弟だと自覚しています。私たちの心が、今、人  
間として、寂しく、汚く、地上を歩んでいるとしても、真に人間として、苦しもうと  
して、努力している以上、私たちは何でたった一人でしょう。

美しい心に、正しい心に、静かな心に、そしてそして、私たちの行くべき道はわ  
かって来ます。

## 科学と偶像

自然科学や思想の発達は、人間の迷信を容赦もなく打破って行きます。私たちは偶像を信じるほど、哀れであつてはなりません。野蛮人のように、牛を飾つて拜んだり、蛇を祭つたり、火を信じたりすることは出来ません。「科学の発達した今日、宗教などがあるでしょうか」と、度々聞きます。「偶像を拜せよ」とは言いません。けれども、私の心が今ここにある、それを信じない人はない。誠、愛、を信じないものはない。霊又は、實在(万物に内在する誠の普遍相、又は神、仏と言つてもよい)を信じないわけには行かぬ。

## 苦痛の中の法悦

□苦しみなさい。煩悶なさい。その苦しみや、その煩悶が現在のあなたの生活に不満を感じ、無意義を感じ、向上の一路をたどるための煩悶なら、解決のつくまで煩悶なさい。苦しみなさい。

雪隠に入つてなれたらその臭気はわかりません。醉生夢死、ただ徒に暮せば、煩悶も苦しみありません。

煩悶のための煩悶でないかぎり、煩悶は大切に育てて解決なさい。

弱い人間たちは、煩悶の苦しみに堪えないで、煩悶から横道に逃げて、その苦しみを避けようとしたり、無自覚な状態に逆戻りしたりします。それではなりません。私たちが、私たちの内に、自覚を見出した時、必ず煩悶に出会います。煩悶は、向上の第一階段であります。煩悶なきものに勝っています。けれども煩悶は、古い我の破壊の苦しみであります。その後には、煩悶を超越した光明を見出さねばなりません。私たちが煩悶を正しく真直に苦しんだ時、その後にはきつときつと、光明に輝く自分を見出すでしょう。私たちは、法悦に躍る私を見出すでしょう。

□私のように富のない方よ、私のように位のない方よ、私たちには、別荘もありません。自動車もありません。位もありません。けれども何で悲しむことがいりましよう。何で恥かしかることがいりましよう。

私たちは一生懸命働いています。私たちは働いて、食っています。私たちの労働で得たものをもって暮しています。何で恥ずかしかることがいりましよう。私たちが正しくて、私たちが自分の力で生きている以上、私たちはうれしい気持ちで揚々として、大道を歩みつつ、いよいよ自重して突進しなくてはなりません。百姓が何で卑しかろう。職工が何でいやだらう。自分たちの職業を辱しめてはなりません。

俳優の真似して遊んでいたりと、飲屋の家内を殺したりするような華族の若様より、車に乗せて走る車夫の方がどれだけ尊いでしょう。働いて食っている私たちに、苦しい中にも、どれだけ人間らしい悦びがあるでしょう。

忙しい体、忙しい身の上と申します。忙しい者は喜ばねばなりません。

この忙しさも自己向上のため、社会のためと思うなら、喜んで忙しく暮らしましょう。私たちはまだまだ仕事をしていることが足りません。昔からの精力家は、一夜三時間、四時間しか睡眠時間を取っていません。私たちは、それに較べたら、どれ位怠けているか知れません。

朝早くから来る時間も来る時間も、自分の何かしてる有益な仕事で充たして、うれしい一日を満足の内に暮して、健康な体を寝間に横たえ、思うこともなく深く安らかに眠り得る人は、何という幸福でしょう。仕事の無い一日を、病と消化不良と不平に暮して、寝間の中で眠られないままに苦しむ者とは何という大きな違いでしょうか。忙しきものは祝福されて健康を感謝しなくてはなりません。私たちは時間の不足を常に感じます。けれども私たちの自由に使い得る意義ある時間は、待つべきものでなくて、造るべきものであります。忙しい中にも時間を造って、修養につとめなくてはなりません。そして、忙しいその真ただ中にも、これが私の生きる道と、心からの法悦に満足しなければなりません。

## 餓鬼道

仏家は言う。鐵圍山の間には餓鬼道があつて、そこに餓鬼がいるような。人間の内で「慳貪にして布施を欲せず。窃盜して、両親に孝せず。黒闇にして、慈心あることなし。財物を積聚して育て衣服せず。父母兄弟妻子奴婢に給せず。」以上の五つの因によつて、ここに行くそうだ。何山とか未来とかそんな処まで行かなくてもよい。心が邪慳で、欲がふかくて小盗人したり、金をためても、使うことを知らなかったり、自分一人は十分にしても、家族や、下女下男には、菓子一個もおしい様では、この世で立派に餓鬼道だということが出来る。